

意識のハードプロブレムは解決可能にちがいないが、 もうすこし面倒な問題かもしれない

鈴木貴之 (南山大学)

戸田山は、『恐怖の哲学』の第III部で、恐怖の意識体験を題材として、意識のハードプロブレムの解決（への準備作業）を試みている。表象理論を手がかりとしてハードプロブレムの解決を目指すという路線を共有する発表者にとって、戸田山はとても心強い援軍なのだが、戸田山がハードプロブレムを処理するやり方は、二つの点で独特であり、それゆえ問題含みであるように思われる。

戸田山の立場が独特である第一の点は、反物理主義ゾンビの可能性は拒否しつつ、「反機能主義ゾンビとは共存していくという戦略をとる」(p.366)という戦略にある。

反物理主義ゾンビの可能性が物理主義者にとって問題となるのは、反物理主義ゾンビが可能だとすれば、ある存在者の物理的なあり方がすべて決まったとしても、意識体験の有無は決まらないことになるからである。物理主義者はこの可能性を認めるとはできない。これにたいして、反機能主義的ゾンビの可能性から帰結するのは、ある存在者の機能的なあり方が決まったとしても、意識体験の有無は決まらないということである。意識にかんして機能主義をとる物理主義者は、通常、反機能主義的ゾンビの可能性も否定する。他方、反機能主義的ゾンビの可能性を受け入れつつ物理主義を維持しようとするならば、機能を実現する素材の違いが意識体験の有無をもたらすと考える立場をとることになる。

しかし戸田山は、いずれの立場もとらず、「反機能主義ゾンビを退治しないのは、退治できないからだ。そしてその理由は、われわれも部分的に反機能主義ゾンビだからだ。」(p.367)と主張する。われわれが部分的に反機能主義ゾンビである理由として戸田山が挙げるのは、たとえば無意識的な情動の存在である。戸田山は、「ゾンビは、どんな機能も機能であるかぎり、それを実現するやり方は一つとは限らない、という自明の理を述べている。」(p.421)と述べ、反機能主義ゾンビの存在は深刻な問題をもたらさないと主張する。

しかし、これは奇妙な主張であるように思われる。たしかに、身のまわりの脅威に迅速に対処するというような機能は、さまざまなやり方で実現できるだろう。そしてそのなかには、意識体験を含むやり方と含まないやり方があるかもしれない。しかし、意識のハードプロブレムにおいて問題となっているのは、なぜあるやり方にだけ意識体験がともなうのかということである。そして機能主義者は、意識体験をともなう過程とそうでない過程の違いは、なんらかの因果的機能にあると考えるのである。そうだとすれば、ある機能にかんして反機能主義ゾンビが可能である（どころか実在する）とすれば、機能主義者は、その機能は意識体験を実現する機能ではないと考えるべきなのではないだろうか。

戸田山の立場が独特である二番目の点は、意識のハードプロブレムにかんするある種の問いを拒否する姿勢にある。

戸田山は、意識のハードプロブレムの解決として必要なものは、「水はH₂Oである」というような「正体突き止め仮説」(p.424)だと述べ、プリンツのAIR理論はそのような仮説の一例であるという。そして、このような仮説が提出されてもなお、「なぜAIRは感じを伴うのか」と問うことは、「なぜ水はH₂Oなのか」と問うのと同様、答えのない問いを問うことだと主張する。

しかし、これら二つの問いは異なる種類の問いであるように思われる。「水はH₂Oである」という仮説は、摂氏100度で沸騰する、摂氏0度で凍る、凍るときに体積が増えるなど、水のさまざまな性質をこの仮説によって説明できることによって正当化されると考えられる。これらの説明が与えられたのちに、なお「なぜ水はH₂Oなのか」と問うことは的外れであるように思われる。同様に、AIR理論が有望な正体突き止め仮説となるためには、意識体験のさまざまな特徴をこの仮説によって説明できなければならないだろう。ここで、意識体験は独自の感じを伴うということは、意識体験は行動の制御に利用される、意識体験の内容は言語報告可能であるといった特徴と並んで、正体突き止め仮説によって説明されるべき特徴であるように思われる。したがって、「なぜAIRは感じを伴うのか」という問いが、「意識体験がAIRだと考えたら、意識体験が感じを伴うことを説明できるか」という問いなのだとなれば、これは正体突き止め仮説が説明を与えるべき問いであるように思われる。

そうだとすれば、これまでの論者が意識のハードプロブレムの解決に過剰な要求を課してきたということは、それほど簡単には言えないことになる。

これら二つの点で発表者は戸田山と見解を異にするが、ハードプロブレムを解くとはどのようなことかはじつははっきりしていないという戸田山の指摘は、意識の自然化を進めるうえで重要な問題提起だと思われる。ハードプロブレムにたいする解決案は、どのような問いに答える必要があり、どのような問いに答える必要がないのかを具体的に明確にすることは、この問題について生産的に論じるうえで、ゾンビの可能性について思いをめぐらせるよりも、はるかに重要な作業だろう。